鳴門教育大学研究紀要
第25巻　2010

Mortimerの地理書の概要：プリュザン『モーティマー夫人の不機嫌な世界地誌』批判

立　岡　裕　士

（キーワード：Mortimer，F.L.　Pruzan，T.　19世紀イギリス　地理教育　児童書）

1　はじめに

19C中葉にイギリスで活動した児童文学者Mortimer（1802～1878）が書いた児童向け地理書（*Near home*と*Far off*との2部作）から奇矯な記述を抄出したものが2005年に出版され（Pruzan & Mortimer（2005）），その日本語訳書が2007年に出版された（プリュザン，2007）。筆者は，Mortimerの原作（の一部）に当たった結果，PruzanによるMortimerの性格付けが誤っているばかりかPruzanの抄出は改竄に類するものであることを知った。当時は*Near home*を見ることができなかったが，その後Googleによって*Near home*の二つの版も公開され，Mortimerの原作を一通り知ることができた。そこで遅ればせながら，歪曲されたMortimer像を多少とも正すために，あらためてPruzanの著作を批判したい。「通俗的地理学」に関する検討が，近代アカデミズム地理学の背景としてであれ社会知の一部としてであれ重要であること，にもかかわらずいずれに社会についてもほとんど進んでいないこと，はあらためていうまでもない。Mortimerの地理書はイギリスの事例を考える上で少なくとも一つの手がかりとなるであろう。したがって，本来であればPruzanを批判するという消極的な作業よりもMortimerの地理書を文脈的に位置づけるという積極的な作業を進めるべきであるが，現時点ではその目標はいささか遠大にすぎる。本稿はそのための踏み石である。

2　Mortimerの地理書の概要

Mortimer[1)]はLondonの銀行家の娘として生まれた。初めはFrend会信徒であったが25歳の時に福音教会員となった。その年に父親の地所に教区学校を設立した（この学校の実態やMortimerの関与の仕方などの詳細については，筆者はまだ知りえていない[2)]）。1841年に結婚し1850年に死別した。著作活動は独身時代に始まり，*The peep of day*（1833）など5部の書を出版した。その後，結婚生活時代に4部，寡婦となって以後に7部を発表している。

⑴　書誌

Mortimerの地理書は，ヨーロッパ編（*Near home*[3)]）とその他の地方編（*Far off*）との2部3冊（*Far off*がpart I・part IIの2冊）からなり，初版以降2度改訂された（表1[4)]）。British Liblaryのオンライン目録（http : //catalogue.bl.uk/F/?func=file&file_name=login–bl–list）によればMortimerの死後はMeyer，L. C.[5)]が改訂して刊行を続けたようである。現在インターネット上に公開されているものは，*Near home*は1850年版・1866年版各1種，*Far off 1*は1852年版3種，1856年版・1869年版各1種，*Far off 2*は1854年版2種，1856年版・1860年版各1種，である[6)]。約10年ごとに改訂されただけでなく，その間にしばしば増刷されていたらしい[7)]（MacFadden（2005～2006）が掲げる目録による限り，Mortimer自身が改訂版を出したのはこれらの地理書のみである）。

表1　Mortimerの地理書の発行状況

	初版		二版		三版				
Near home	1849 1850		1857	*1860*	1878		*1884*	*1888*	*1902*
*Far off 1**	1852 1853	*1859*	1864		1875	*1879*	*1882*	*1890*	
Far off 2	1854 1854	*1860*	1864	*1872*	1875		*1885*	*1893*	*1901*

各書とも上段は英国における発行を，下段は米国における発行を，示す。
**Far off part I*をこのように略記する（*Far off part II*についても同様）。
斜体字は各版発行年以外の版でBritish Libraryの目録に著録されているものを示す。
*Far off 1*米国1853年版・*Far off 2*1860年版については本文の注4）を参照のこと。

Far off は1900年までの50年間に累計55000部売れたという（MacFadden, 2005～2006）。100万部以上刷られたという *The peep of day*[8] に比べれば少部数とはいえ，長く多くの読者に読み継がれたといえるであろう。

(2) 執筆の意図

Mortimer の意図は両作品の序文に示されている（両序文とも，初版・二版で違いはない）。*Near home* では下記２点を述べる（長さの点では，中心となっているのは①で，②は付加的である）：

①子どもに知識を習得させる以前に，その知識欲を涵養すべきである（親・教師が強制して知識を覚えさせるのではなく，子供の自発的な欲求として知識を求めるようにさせる）。そのためには幼少年期には「中身のある［solid］」本に先んじて「表層的・不十分・些末」な内容の本を与えねばならない。本書はそうした目的に供するためのものである。

②世俗的・有用な知識を習得することが人生の目的ではなく，神への奉仕に役立つがゆえに知識は価値がある。したがって本書では折に触れて信仰心を振起することにつとめた。

Far off の序文では，小説批判も絡めて，②の点が敷衍されている。

③子どもの関心が小説などの有害無益なものに向えば，軽佻浮薄な人間となる。それを防ぐために子どもは虚構ではなく事実に誘導しなければならない。

④事実の中でも，真理とその普及に関わる事実とが最も重要である。したがって本書は子どもたちに宣教活動への関心を興起することを目的とする。諸国の「風景・住民」について記載するのは，子ども向け宣教雑誌を読むための予備知識を授けるためである。

特に④は②の系にすぎないとはいえ，*Near home* 序文において②が付加的に論ぜられていたことからすれば，④が議論の中心を占める *Far off* 序文は *Near home* 序文からはなにがしかの変化があるようにも思われる。それが Mortimer の立脚点の変化であるのか，あるいは記述対象の違いによるのか，はさらに検討すべきであろう。いずれにせよ，如上の意味で Mortimer の地理書は宗教的な指向性を強く持っている。その点でカーペンター・プリチャード（1999, p. 854）が本書を「宗教とは関係ない」とするのは当たらないと思われる。しかし後述するように，本書の宗教性は限定されたものでもある。

(3) 構成

・*Near home*

初版（本文308ページ。挿図18）は単純に国別の記載が並べられている（ただしシチリア島を除くイタリア諸邦が一括されている一方，ドイツ諸邦はプロイセン・オーストリア・Germany に分けられ，オーストリアとは別にボヘミアとハンガリーとが立項されている。イングランド・ウェールズ・スコットランド・アイルランドは他の独立国と並立され，Lapland も同様である。国名とその配列順・ページ数は表２に示した。なお，Mortimer 自身は自己の記述の単位が何であるかは記していない。これらを「国別」というのは純粋に筆者の用語である）。国の配列は北欧・東欧・・・などのまとまりにはしたがっていない。またいかなる基準によって配列したかも説明されていない。典拠とした旅行記が一定の国々をまとめる指針となっている可能性が考えられる（あるいはそれが示唆する，交通路に沿った配列）。その一方で，比較のための配列という可能性も考えられる（叙述の単調さを破るため，あるいは読者の理解・記憶に便利なため？）。たとえばイタリアの冒頭には「ロシアの雪に埋もれた森から陽光あふれるイタリアの平野に行くなら，誰にとってもその違いは大きい！」（p. 147）としてそれに先行するロシアとの違いに着目させる。アイスランドからシチリアに移る際も同様である（ただし気候の違いだけでなく両者が島であることの共通性にも注意が払われている。シチリアからスカンディナビア諸国に移る際には気候の相違ではなく，両者が半島であることの共通性が取り上げられている）。その他に二つの「国」を対比する叙法は，フランス（イングランド）・ポルトガル（スペイン）・ポーランド（プロイセン）などでもとられている（それぞれ括弧内の国が，先行する比較対象。また明示的な比較の文章はないが，低平なオランダ・ベルギーのあとにスイスを配したことも対照のためかもしれない）。各国の記事は多くの場合，country・food・dress・children・house・character・appearance・animals その他の項目に分けて記述されているが，項目の立て方・並べ方は一定ではない。

二版（本文404ページ。挿図69）では国別記事（317ページ）は part II とされ，その前に，part I として introduction がつけられた。また巻末には３ページの conclusion が設けられた。part I は83ページなので，ページ数からいえば初版からの増補分は part I に宛てられたと言える。しかし１ページの行数が26から30に変わっているので，内容的にはそれ以上に増補されたと見られる[9]。part I は冒頭に地球全体についての説明があり，次いで諸国の国別の概要記事，さらに，服装・産物・動物・首都・地貌，貧民の食事・服装，についての国別の総括が記されている。part II の国別記事を単純に要約したものでもないが内容に大きな違いはなく，屋上屋を重ねた感がある。しかも part I における国別記事と part II における国別記事とでは，「国」の取り上げ方に違いがあり（ボヘミアを立てない一方，Sardinia, and Corsica and Malta を立てる），国の配列順も相違する（part II における記載方法は初版と同じである）。挿図は，初版掲載のもののうち削除されたものはない（微細な違いながら差し替えられた（？）ものが２枚ある。初版 p. 98・124，二版 p. 173・198）。さらに初版には地図が

表 2　*Near home* の国別記事

	ページ数		初版において Mortimer が用いた典拠
	初版	二版	
England	12	10	
Wales	3	7	*Child's companion*（1845－1） Kohl, J. G.（1844）Travels in *England and Wales*
Scotland	19	18	Kohl, J. G.（1844）*Travels in Scotland* Trench, F.（　　）*Scotland*
Ireland	16	20	Kohl, J. G.（1843）*Travels in Ireland* Baptist Noel（　　）*Tour in Ireland*
France	23	20	Trench（　　）*Travels in France* Clarke, A.（1843）*Tour in France, Italy, and Switzerland* Wordsworth, Ch.（1843）*Diary in France* Nef, F.（　　）*Memories*
Spain	25	24	Borrow（1842）*Bible in Spain* Conder, J.（1824～1834）*The Modern Traveller*
Portugal	8	7	Borrow（1842）*Bible in Spain* Conder, J.（1824～1834）*The Modern Traveller*
Russia	28	27	Kohl, J. G.（1842）*Russia* Venables, R. L.（1839）*Domestic Scenes in Russia* de Custine, A. L. L.（1844）*The Empire of the Czar*
Italy	13	13	Dickens, Ch.（1846）*Pictures from Italy* Conder, J.（1824～1834）*The Modern Traveller*
Germany	14	14	Howitt, W.（1842）*Rural and Domestic Scenes in Germany*
Austria	7	7	Kohl, J. G.（1843）*Austria, Vienna, Prague, Hungary, Bohemia, and the Danube ; Galicia, Styria, Moravia, Bukovina, and the military frontier*
Bohemia	4	3	
Hungary	10	10	
Prussia	9	9	Mortimer, F. L.（1844）*The Banished Count* Howitt, W.（1842）*Rural and Domestic Scenes in Germany*
Poland	12	10	Spencer, E.（1836）*Sketches of Germany and the Germans, with a glance at Poland, Hungary and Switzerland* Stephens, J. L.（1838）*Incidents of travel in Greece, Turkey, Russia and Poland* Kohl, J. G.（　　）*Poland*
Holland	11	11	Chambers, W.（1839）*A Tour in Holland, the Countries on the Rhine, and Belgium*
Belgium	6	5	Chambers, W.（1839）*A Tour in Holland, the Countries on the Rhine, and Belgium* Massie, J. W.（1846）*Recollections of a Tour. A Summer Ramble in Belgium, Germany and Switzerland*
Switzerland	12	13	Chambers（　　）*Travels* Alexander, W. L.（1846）*Switzerland and the Swiss Churches* *Children's Friend*（1847－1）
Denmark	4	4	Brenmer（　　）*Denmark*
Iceland	12	12	Mackenzie（　　）Travels（inserted in Chamber's Journal）
Sicily	9	8	
Sweden	13	13	（　　）The Swedish Shepherd Boy（the Religious Tract Society）
Norway	11	10	*Bible Society Report*（1847） Milford, J.（1842）*Norway and her Laplanders in 1841* Milford（　　）*Two Summers in Norway*
Lapland	7	12	Milford（　　）*Visit to the Lapps*
Turkey	10	13	Madden（　　）*Travel* KENE, F. M. Frances（1845）*Wayfaring sketches among the Greeks and Turks* Fisk, G.（1845）*A Pastor's memorial* of the Holy Land Walsh（　　）*Travels*
Greece	11	17	KENE, F. M. Frances（1845）*Wayfaring sketches among the Greeks and Turks* Wilson, S. S.（1839）*A narrative of the Greek Mission* Stephens, J. L.（1838）*Incidents of travel in Greece, Turkey, Russia and Poland*

Mortimer が利用した文献の書誌は，単行本は「著者名（刊年）書名」，雑誌は「書名（刊行年月）」の形式で記した。原則として書名は副題は省略し，主題でも長大な場合は先頭部分のみを採った。単行本は下線部分が Mortimer の記している書誌である

表 3　*Far off* の国別記事

	ページ数		初版において Mortimer が用いた典拠
	初版	二版	
Asia	1	1	
The Holy land	15	14	Fisk, G.（1845）*A Pastor's memorial* of the Holy Land
Sylia	7	8	Fisk, G.（1845）*A Pastor's memorial* of the Holy Land Kinnear（　　）Travels
Arabia	14	15	Fisk, G.（1845）*A Pastor's memorial* of the Holy Land
Turkey in Asia	11	10	
Persia	10	10	Southgate（　　）Travels
China	32	31	Du Halde, J.–B.（1738～1741）*A description of the empire of China and Chinese–Tartary* Smith, G. Medhurst, W. Davies, E.（　　）*China, and her Spiritual Claims*
Cochin China	3	2	Murray, H.（1820）*Historical Account of Discoveries and Travels in Asia*,
Hindostan	45	100	*Church MIssionary juvenile Instructor*（1849） *Juvenile Missionary Magazine*（*1849－4*） *Church MIssionary juvenile Mazaine*（*1849－3*） *The Pilgrim Boy of Monghyr* Weilbrecht（　　）*Children's Missionary Magazine* *Church Missionary juvenile Instructor*（1850－3） *The Little Missionary* Weitbreht, J. J.（1844）*Protestant Missions in Bengal* Leupolt, C. B.（1846）*Recollections of an Indian Missionary* Tucker, S.（1842）*South Indian Sketches* Chapman, P.（1839）*Hindoo Female Education* *Hindostan*（in Library of Entertaining Knowledge）
Circassia	17	16	
Georgia	2	2	
Tartary	26	25	De Hell, X. H.（1847）*Travels in the Steppes of the Caspian Sea, the Crimea, the Caucasus, etc*. Smith, Th. & Choules, J. O.（1832）*The origin and history of missions* Burnes, A.（1834）*Travels into Bokhara* Kanikoff（　　）*the Russian* Woif, J.
Chinese Tartary	2	－	
Affganistan	8	7	
Beloochistan	6	1	
Burmah	23	22	Malcom, H.（1839）*Travels in Eastern Asia*
Siam	6	6	Malcom, H.（1839）*Travels in Eastern Asia*
Malacca	9	9	Malcom, H.（1839）*Travels in Eastern Asia* Soc. for Prom. Female Edu. in China, India and the East（1847）*History of the Society for Promoting Female Education in the East* Tomline（　　）*Missionary Journal*
Siberia	19	18	*Juvenile Missionary Magazine*（1850－2） Erman, A.（1848）*Travels in Siberia* Dobell, P.（1830）*Travels in Kamtchatka and Siberia*
Thibet	4	57	
Ceylon	11	10	
Borneo	13	12	Keppel, H.（1845）*The Expedition to Borneo of H.M.S. Dido* Mundy, R.（1848）*Narrative of events in Borneo and Celebes* Belcher Marryat, F. S.（1848）*Borneo and the Indian Archipelago*
Japan	7	19	Belcher, E.（1848）*Narrative of the voyage of H. M. S. Samarang*
Australia	17	60	
Van Dieman's Land	21	－	

	ページ数		初版において Mortimer が用いた典拠
	初版	二版	
Africa	1	1	
Egypt	23	22	Lane, E. W.（1836～1837）*An Account of the Manner and Customs of the modern Egyptians* Lane, E. W.（1844）*The Englishwoman in Egypt* John, J. A.（1845）*Egypt and Nubia*
Nubia	5	5	
Abyssinia	22	21	Harris, W. C.（1845）*Illustrations of the highlands of Aethiopia* Gobat, S.（1834）*Journal of a three years' residence in Abyssinia*
Barbary	7	7	Schwartz, M. E.（1850）*Leaves from a Lady's Diary of her Travels in Barbary* Urquhart, D.（1850）*Pillars of Hercules* Count Marie（　　）*Algeria*
South Africa The Cape Colony	24	23	Moffat Napier Cumming, G.（　　）*Travels* Smith, Th.（1824～39）*The History and Origin of Missionary Societies*
The Caffres	31	16	Gardiner（　　）*Narratives*
(The Bechuanas)		15	
Guinea, or Negroland	8	8	Lander
Ashantee	5	4	Beecham, J.（1841）*Ashantee and the Gold Coast*
Dahomey	6	6	Duncan
Sierra Leone	6	5	*Church Juvenile Instructor*
(Bourbon and Mauritius)		1	
(Madagascar)		44	
America	1	1	
The United States	42	40	*History of Zamba*
British America	7	7	
The North American Indians	31	24	*Missionary Gleaner*
(Rupert's Land)		6	
California	6	5	
Greenland	15	14	Crantz, D.（1767）*History of Greenland* *Moravian Reports*
The West Indies	1	9	
Jamaica	8		Phillippo, J. M.（1843）*Jamaica*
Mexico	15	14	Calderon de la Bares Mason, R. H.（1852）*Pictures of Mexico*
Central America	1	1	
Brazil	9	9	
Peru	8	8	Schudi, T.（　　）*Travels*
Chili	2	1	
La Plata	5	5	
Guiana	6	6	Brett（　　）*Mission in Guiana*
The Great Pacific Ocean	1	1	
New Zealand	30	29	*Church Missionary Intelligencer* *Missionary Gleaner* *Church Missionary Juvenile Instructor*

文献の表記法は表２に等しい

なかったらしい[10]が，二版では巻頭に欧州の地図がつけられ，part I 冒頭に東西両半球に分けた小さな世界地図が掲げられた（ただし欧州地図は目次にはあるものの，筆者の閲覧したファイルには含まれていないため詳細は不明である）。

三版は Blitish Library の目録によれば1884年版は529ページ，1888年版・1902年版は535ページである。二版と比べて，Mortimer 自身または Meyer によって相当の増補がなされたことがうかがえる。

・*Far off*（表３[11]）

初版では part I（本文330ページ。挿図43）でアジア・オーストラリアを扱い，part II（本文323ページ。挿図54）でアフリカ・アメリカ・「太平洋」[12]を扱う。各国記事の形式は *Near home* と大差ないが，宣教活動に関する記事の比率が大きい点で相違する。*Near home* では国により記事に長短の差はあったが半数の国は10ページ代であり，差は顕著ではなかった。これに対して *Far off* では40ページ以上の国が２，30ページ代の国が４，ある一方で，10ページ未満の国が27もある。アジア・アフリカ・アメリカ・「太平洋」には総記[13]がある。また *Far off* には初版から地図がある。part I には平射方位図法によると思われるアジア・オーストラリアの地図，part II にはメルカトル図法によると思われる世界全図である。

二版では「Hindostan・チベット・日本に関する情報が増補された結果」（part I, p. xiii），part I（本文395ページ。挿図54）はアジアのみとなり，オーストラリアは part II（本文416ページ。挿図59）冒頭に移された（すなわち二版でもオーストラリアは「太平洋」に属していない）。南アフリカ・西アフリカ・南アメリカ（見出し上は中央アメリカも）がアフリカ・アメリカと並んで州として扱われるようになった（総記はない）。「国」の取り上げ方では初版の Chinese Tartary が削られ，その位置にチベットの記事がおかれた（Chinese Tartary の記事は中国政府によって外国人の立ち入りが禁じられているという程度のものであったが，ヤルカンドにおける交易記事などもあった。それが他の部分に移されることなく削除されている。二版で削られた国には他に Van Dieman's Land もあるが，これはオーストラリア内の地区扱いとなったにすぎない）。上引の３国のうちインド・チベットの記事は他との均衡を欠くまでに大きくなった。アジア諸国の扱いに関してはほかに大きな変化はない。アフリカでは The Caffres の一地区であった The Bechuanas などが国扱いに変わり，Bourbon and Mauritius および Madagascar は新たに立てられた。Central America は州と同じに扱われているが内部に見出しは立てられてらず，事実上「国」と同じ扱いである。アフリカの扱いが変わったことは，Mortimer の知識の変化（もとより探検・宣教活動の進展の結果として）を反映したものであろう。ただし *Far off* 全体を通して，内容的には，基本的に初版の文章はそのままで新しい情報を付加するのが通例である。チベットや日本のように状況が著しく変わった場合には旧版の文章を全面的に書き換えているが，例外に属する。挿画に差し替えはないが，part I 初版ではシャムの項に「ビルマの女性と子ども」と題された絵が挿入されていた（p. 210）。二版（p. 322）では題名が「シャムの女性と子ども」に換えられている。

三版は British Library の目録によれば，１の1879年版は615ページ，２の1901年版は648ページである。*Near home* 同様，Mortimer 自身または Meyer によって二版に比べて大幅な増補がなされたらしい（なお二版以降 part II の副題は *Australia, Africa, and America described* であったが，同目録によれば少なくとも1885年以降は *Oceania, Africa, and America described* に変更になったようである）。

(4) 典拠

Near home 初版では46，*Far off* 初版では69，の文献が典拠として挙げられている（数字は延べ数）。Mortimer の書誌の表記は不十分であるが，British Library の目録により，*Near home* のうち33，*Far off* のうち50の文献は該当すると思われるものを見つけることができた。その限りでは，彼女の知的環境および本書の目的からして当然のことながら，宣教師の報文や旅行記が多い[14]。刊行時期は1840年以降のものが過半を占める（*Near home* で22，*Far off* で26。*Far off* では1850年代のものも４ある）。宣教師の活動についてはもとより，各国の「風景・住民」に関する記事のためにも新しい情報を求めていたことが分かる。このことは二版についても該当するであろう（たとえば *Far off 2* 二版（1868年版）のマダガスカルの末尾には，1861年の年次のある記事と1864年の年次のある記事（しかもその冒頭には '1864–More news from Madagascar!' とある）とがあり，1860年版（注４）参照）には当然これらの記事はない。一つの版の中でも細かな補訂が行われていたことがうかがえる）。その探索範囲も教会関係に限られていない。*Far off 2* 二版では日本について Spalding（1855）や D'Almeida の旅行記（*A Lady's Visit to Manilla and Japan.* 1863年刊）を利用している。その一方，表３から明らかなように，アメリカ諸国に関しては明示された参考文献が異常に少ない。

これらの文献の利用の仕方についてはまだ検討していないが，上で触れた Spalding（1855）を事例として紹介する。この文献は *Far off 2* 二版 pp. 392～395で利用されている。日本では遵守困難な法が人々に強制されているという話の一環として海外渡航禁止を取り上げた箇所の一部である。難破船の乗組員が法を犯すことを恐れてロシア船に救助されることを拒んだ話のあとに，「この法を耐え難いと考えている人々もいる」として吉田松陰の密航未遂事件を記す[15]。この事件の顛末が Spalding（1855，pp. 275～277，281～285）によって記述されている。Spalding の原文と比べ，Mortimer の記述は簡約・平明化されており脚色も１箇所ある[16]が，格別の誇張や歪曲もなく基本的に Spalding の記載内容を忠実に伝えている。

Mortimer が利用した旅行記が，研究者（たとえば Kohl，J.G.など）の手になるものであることは当時の出版事情からして当然かもしれないが，それであっても特にヨーロッパに関しては少なからぬ数の文献が存在していたであろう。Mortimer がいかにして選択したのかも検討すべき課題である（たとえば彼女の利用したであろう貸本屋が偶々備えていただけという可能性もあろうが，彼女と交流のあった宣教師からの指導や先行の地理書が利用している文献を参考にした可能性も考えられるのではなかろうか）。

⑸　叙述の態度

・宗教性・教訓性

Mortimer の地理書は宗教的ではあるが，その宗教性は，もっぱら神を信仰するという態度に局限されている。Mortimer はたとえば Guyot（1848）とは違い，陸地の形態や配置に摂理を読み取るようなことはない。Mortimer の記述の仕方では地誌自体は教訓になりえない。なぜなら，彼女は（不）信仰と地上での栄枯盛衰とを因果応報的に論じておらず，したがって，異端・異教を信ずる人々が批判・慨嘆・憫笑の対象になったとしてもそのことから新たな教訓は帰納されないからである（たとえば，インドの人々は異教徒であることの報いでイギリスに支配されているわけではない）。

Mortimer は，地誌の知識が宣教活動に関する子ども向け月刊誌を読むための予備知識になる，とした。しかし実際には，狭義の地誌的部分と宣教活動記事とがさほど有機的につながっているようには見えない。ましてヨーロッパでは，救貧活動や禁酒禁煙活動がなされていたとはいえ，宣教師の報告を読むための予備知識としてという意味は薄れざるをえまい。Mortimer がその点をどのように考えていたかは明らかではない。

・中華思想・差別・nationalism

Mortimer は自己が属ずる文化（宗教も含む）を文明の絶対的な極点と見て，他の文化を評価・裁断する。このような中華思想を単純な差別論と見ることはできない。なぜなら文明の階梯を上ることで，劣等な民族でもより優等な状態に達することができるからである（文明化したホッテントットを「使用人として役に立つ」（*Far off 2* 初版 p. 74）とする時，おそらくその質を英国人の労働者階級より下に見ているわけではないであろう）。ただし，あらゆる社会集団がその階梯を最上点まで上ることができると考えていたのか否かは不明である。Mortimer は魂の平等を説いている（「ホッテントットに魂があるならば，彼らは神の前に我々と同じように貴い」（*Far off 2* 初版 p. 61））。しかしその観点は，魂とその他の人間の形質・能力とを分離することを可能にするがゆえに，格差・差別の是認にも否定にも利用可能である。

いずれにしてもこの中華思想はイギリスの文化を規準とするものながらそこにイギリス性を認めるものではないから，Mortimer の地理書は「国民」意識とは縁の薄いものとなる。*Near home* にはそもそも英国が存在しない。イングランドについても，「どの子どもも自分の国が一番好きだ」（*Near home* 初版 p. 14）とされ，愛国心は幼児的な心性であるかのごとく扱われている。Mortimer は英国の中国侵略を批判し（*Far off 1* 初版 p. 88），アフガニスタン人の反英戦争を支持する（*Far off 1* 初版 p. 175）。19C 末の英国の地理教育界で Mortimer が受容されなくなったのは国民意識育成を強調する動き（川本，1997）にそぐわなかったからではなかろうか[17]。

・慈善主義

Mortimer は多くの国において，貧民の生活を，あるいは単独で，あるいは富民の生活と対比しながら，記述する。そしてたとえばハンガリーにおいては，国民が貧富二極分解し，貧民が領主のために抑圧・搾取されることまで描かれる（*Near home* 初版 p. 191）。あるいはロシアでは皇帝が超法規的に恣意的な政治を行っていることを記す（*Near home* 初版 p. 191）。しかしそれらの問題は個々の富民ないし権力者の悪徳に帰せられ，体制問題・社会問題として扱われることはない。

本書の読者として中流階級が前提とされていることは，たとえば，普通の人［people in general］がイングランドでは自己所有の家に住み自家の使用人を使っているのに対してボストンでは下宿に住み下宿の使用人に給仕されている，という記述（*Far off 2* 初版 p. 140）に見ることができる。*Far off 2*（1856年本）巻末に付けられた広告によれば *Near home* は５シリング，*Far off* は各冊４シリングである[18]。この価格では中産階級でも購入は困難であり，労働者階級には不可能であろう[19]。しかし貸本社会である当時の英国（清水，1996）では労働者でもこうした本を読むことは可能であったかもしれず，また日曜学校などの褒賞として本書（またはその特別な廉価版）が利用された可能性も考えらえる。とはいえ Mortimer がそれを意識していたとしてもそのことは内容に明確な影響を与えてはいないのではなかろうか。Mortimer の中華思想は他民族のみならず貧困層に対しても同様に機能したであろう。

3　Pruzan 批判

Pruzan の *The clumsiest people in Europe* は，Mortimer の地理書を抄出したものである。Pruzan による序章に続いて，3 部からなる本文は，それぞれが *Near Home*・*Far off 1*・*2* に対応する（ただし各国記事の冒頭に，当時の概況を Pruzan が付記している[20]。Pruzan は，訳書の奥付の「編者略歴」によると幾つかの雑誌の編集者をつとめながら自らも執筆するジ

ャーナリストのようである。本書の問題点は，Pruzan の作り出したテクスト（本書 part I～part III）と，序章における Mortimer の性格付けと，の双方に指摘することができる。

⑴ **テクストの問題**

Pruzan は自己の利用した本を明示していないが，本書巻末の文献目録によれば，*Near home* は1852年米国版を，*Far off* は１が1852年の，２が1854年の，いずれも英国版を利用したようである。*Near home* は筆者が利用したものと厳密には同じではないが，*Far off* は同じもののはずである。Pruzan は，Mortimer がしばしば新しい情報を付加して内容を更新しているが故に，可能な限り初版に依拠［stick］したとする（p. 19訳書32）。彼はそれを，Mortimer を公平に扱うためだとしているが，それならば *Near home* についても初版の最初の本を利用すべきであったろう。

しかも彼の資料操作には ‘stick’ の真摯さを疑わせるものがある。彼は，メルボルンの記事は初版には間に合わなかったという理由で削除したといい，マダガスカルの記事については宣教活動の話が冗長であったからという理由も挙げている。しかし初版のみを対象とするのであれば，そこに存在しないメルボルンやマダガスカルの記事についてこうした理由を挙げる必要はないはずである。その上，セミコロンやダッシュの用法あるいは単語など表現の微細な部分で，Pruzan が二版の文章を用いているように見える箇所がある（たとえば Sydney の記事で‘Many of the people are the children of convicts’（*Far off 1* 初版 p. 293）を，二版の文（*Far off 2* p. 36）と同じに，‘Number of the people are....’（p. 135訳書211）としている点である）。日本やアデレードなど二版で大きく変わった国からの引用記事が全て初版のものであるから，Pruzan が実際には初版を利用していなかった，ということはない。要するに彼の作業は少なくとも杜撰だということである。

原作の構成も失われている部分がある。すなわち，既述のように *Far off* 初版では，中央アメリカは国扱いであり南アメリカは全く立項されていなかった。原作にそむいてこれらを立てるべき理由は示されていない。

Pruzan は原作の序文を載せない。先に示したように序文は Mortimer の立脚点を端的に語ったものであるから，原作を評価する際に先ず考慮せねばならない文書である。それを省いたばかりか，序章（p. 6 訳書16）では *Near home* 序文の冒頭（同書が「表層的・不十分・些末」であるべくしてあることを宣言した部分）を遁辞として引用する（p. 11では，*The Quarterly* 誌上の批評に対して Mortimer が同様の論旨で反駁したことを，自己の著作の価値をわきまえて達観したのだ，としてもいる）。曲解としかいいようがない。

記事の採録規準も不明確である。明示された唯一の規準は「個々の宣教隊に関する冗長で脱線気味の逸話」（p. 19訳書32）を削るということである。しかし「国」単位で見ても，Bohemia・Syria・Cochin–China・Thibet・Chinese Tartary・Beloochistan・Van Dieman’s Land・Barbary・Morocco・Port Natal・Bechuanas・Sierra Leone・Chili・Guiana は全く採られていない。そもそも Mortimer が主題としていた宣教活動記事を削る（しかも「脱線」として）こと自体 Mortimer の趣旨に添わないことである。しかし Pruzan は，‘bad–tempered guide’という彼の主題にしたがい，Mortimer の価値判断（特に，Pruzan から見て嘲笑すべき）が明示されている部分を採り上げ，事実を坦々と記載した部分を捨てた，のであろう（たとえばアラビアでは，*Far off 1*（pp. 27～31）が災厄・動物・産物・地方・都市についてそれぞれ三つずつ取り上げて立項しているなかから，本書は災厄の項のみを取り上げている（p. 95訳書150））。

しかも原作からの引用は，項目や段落単位ではなく文単位で行われている。その結果，Pruzan の主張にかなうよう，断章取義的に本文が作り出されている箇所がある。たとえば Pruzan は，二人称を多用した Mortimer の文体が読者を引きつけるという（pp. 3 ～ 4 訳書12）。それは必ずしも誤りではない。しかしたとえば The Holy Land の冒頭（pp. 90～91訳書142～143）で Pruzan は，次のような，質問をたたみかける文章を呈示する（①～⑤の番号は立岡による）：①Of all the countries in the world which would you rather see?／②Would it not be the land where Jesus lived?／③What is the land called where He lived? Canaan was once its name: but now Palestine, or the Holy Land.／④What place in the Holy Land do you wish most to visit?／⑤I will take you first to Bethlehem.
しかるに *Far off 1* 初版（p. 2）では，②と③との間には ‘He was the Son of God: He loved us and died for us.’ という１文があり，③と④との間には ‘Who lives there now?’ という質問と，ユダヤ人がトルコ人にとってかわられたという趣旨の４行の説明があり，④と⑤との間には，子どもによりベツレヘム・ナザレ・イエルサレムなどいろいろ答えるだろう，という５行の文がある。Pruzan が示した急調子な文章は，彼の作為の結果である。

挿絵の処置も改竄に近い。Pruzan は23の挿絵を採用した[21]。原作では挿絵には即物的な表題がつけられている。これに対して本書では，挿絵の内容とは無関係に本文から１文（しかも煽動的なものが多い）を選んでキャプションとしている[22]。このためしばしば挿絵が理解不能なものとなる（たとえば「仮装した踊り手」（*Far off 2* 初版 p. 95）を「もはや野蛮人とは見えず，使用人として役に立つ」（p. 155訳書234）として，「インディアンを教化する宣教師」（*Far off 2* 初版 p. 212）を「英領側の住民はより礼儀正しく慇懃である」[23]（p. 171訳書260）として，「花を採取する黒人」（*Far off 2* 初版 p. 265）を「ブラジル人はメキシコ人ほどは邪悪ではない」（p. 187訳書282）として，見ることは不可能である）。意味が通ずると

すればむしろ誤解の結果であり（たとえば「スイスの小住宅」（*Near home* 初版 p. 234）にすぎないものが「山岳地帯の貧民でさえ日曜の宵には里に下りて酒場で酒を飲む」（p. 72訳書114）というキャプションをつけられれば酒場の絵に見えるであろう），それが価値判断的を含む誤解となるものもある（「カブールの首長」（*Near home* 初版 p. 173）を「男性は恐ろしく見える」（p. 116訳書183）とし，「ビルマの女性と子ども」[24]（*Far off 1* 初版 p. 210）を「シャム人は一見ビルマ人に似ているが，見てくれはもっと悪い」（p. 120訳書189）とすることは，Mortimer の原作を感情的なものに思わせるであろう[25]）。誤解ではなく明白な誤りもある（「仏陀」（*Far off 1* 初版 p. 71）に対して「儒教は賢人のように振る舞うことを教える」云々（p. 104訳書161）というキャプションをつけたのは不注意による誤りかもしれない[26]が，「邪悪な司祭」の絵（*Far off 1* 初版 p. 251）をセイロン王とする（p. 127訳書198）のは改竄の結果の誤りである）。以上のような題名・キャプションの問題に加えて，挿入位置の誤りという問題もある。ホッテントットの項の挿絵である「仮装した踊り手」（上掲）がベチュアナの項に置かれ，カリフォルニアの挿絵（*Far off 2* 初版 p. 220）が米国（p. 166訳書267）に置かれている[27]ことは，誤りの中でもはなはだしいものである。

地誌の教授に地図を併用するべきことは地理教育論の初めから論ぜられており，また実際にそうした方針を採った地理教科書は Mortimer 以前から存在する（Baker，1996）。Mortimer の地理書もこうした動きに与するものの一つである。しかし Pruzan は，あるいは彼自身，地図を使うことなどないためか，地図を省くことについて言及もせず，また地図の利用を前提にした記述を抄出していない。彼の意思が奈辺にあるにせよ，Mortimer に依拠するということからさらに遠くならざるをえない。そのうえ本書には，*The G. A. Gaskell atlas of the world* から採ったという，国民性地図とでもいうべき地図が 4 枚挿入されている（pp. 22，88，90，135）。記載内容は Mortimer の記述に似てしかも異なる。筆者はこの地図帳を未見であり詳細は知りえないが，たとえ Mortimer の影響下で作られたものにせよ，Mortimer がこうした地図を載せていない以上，それを呈示することは Mortimer の真面目を曖昧にする効果しかない。

(2) Mortimer の性格付け

・Mortimer の事蹟について

25ページにわたる序章で Pruzan は，Mortimer の不幸で奇矯な人生を紹介する。あまりに型にはまりすぎていささか信用がおけない記述ぶりは措くとしても，熱烈な福音主義者であれば当然の，彼女の反カトリックの態度について，失恋の相手がカトリックに転向したため（p. 6 訳書16）とすることは単なるイエロージャーナリズム的なステレオタイプであろう。いずれにしても Pruzan が紹介した主な事実は，Mortimer が熱狂的な福音主義者であったことと，旅行をせずに世界地誌を書いた，ということの 2 点にすぎない[28]。彼女が教区学校を設立したことは触れず，したがってそうした教育活動が彼女の作品にどう関わったかを問うこともない。

・福音主義児童文学者としての位置づけ

Pruzan は教訓物語の作者を，「現世の生活に関わる実用的知識を教える合理的道徳主義者」と「神に服従することで幸福・救済がえられるとする日曜学校的な道徳主義者」とに大別し，Mortimer を後者に属するとする（p. 8 訳書18）。さらに彼女を，その中でもとりわけ嗜虐的な作家と性格づけている[29]。しかし Mortimer を日曜学校派とすること自体は誤りではないが，このような性格づけは全体として誤っている。すなわち，合理的道徳主義者と日曜学校派との違いは宗教色がどれほど強いかという点にあったのであり，教訓物語の提供が主たる活動である点では両者に差はなかったからである（松本，1977）。さらに，教訓物語が20C に至るまで書き継がれてきたといっても個々の作家が教訓物語のみを書いていたわけではない。処女作を発表した翌年に Mortimer が実用的な文字教本などを書いたことは Pruzan 自身（p. 5 訳書13～14）が紹介していることである[30]。そうした実用的教本についても Pruzan は Churchill の回想録を引いて否定的な評価を印象づけようとするが，Constable（1950）は，Churchill は例外にすぎないとする。Constable と Churchill とのいずれの評価が妥当であるにせよ，Pruzan の叙述が片手落ちであることは明白である。

・不合理性・非現実性

Mortimer を日曜学校派とすることでその地理書の不合理性を印象づけようという Pruzan の試みが成り立たないことは，上述の点で明らかである。さらに彼は，Mortimer がほとんど旅行の経験もなしに地理書を書いたことを「衝撃的な新事実」（p. 7 訳書16）として暴露している。地理学者と旅行者とを同一視する観念はおそらく19C 中葉に確立した（Stoddart，1986）もので，いまだに根強く流布している（トゥアン，2008）先入観にすぎない。さらに Pruzan はそれと抱き合わせる形で，Mortimer が利用した文献に時代遅れのものが含まれているとして非難する。Pruzan は具体名を挙げていないため判然としないが，表 2 ・ 3 に示したように，筆者の明らかにしえた範囲でも18C の文献は 2 点ある。しかし先ず問題とするべきは文献の質であり，その発表年ではなかろう（もとより発表年自体が質の重要な部分をなしてはいるが）。特に Mortimer が，急激に変化しつつある経済動向よりも，相対的に変化の少ない風景や国民性的なものを取り上げようとしている以上，どのような質の文献をどのように利用しているかを検討せずに非難することにはほとんど意味がない。

内容面では先ず，*Near home* が緊迫したヨーロッパ情勢を反映していないという（p. 6 訳書15）。そして Pruzan は，Mortimer が改訂作業を続けたにもかかわらずその地理書は「進展する世界地図から驚異的・感動的なまでに逸脱している」（p. 9 訳19）として，改訂作業自体をも難じた（その根拠として挙げるのが，マダガスカルの記事に60ページ[31]，グリーンランドに14ページを割いているのに対してニューヨークには 6 文しか使っていない，という点である）[32]。しかし前者は不当である。たとえば *Near home* 初版（p. 75）には民衆の激昂に恐れをなしたフランス王が英国に逃亡したことが書かれている（なぜ民衆が激昂することになったかについては説明がないが）。さらに貧困その他の社会問題が取り上げられていること自体が，こうした社会情勢の反映でもある。*Far off* でも，たとえばセポイの反乱が取り上げられている（*Far off 1* 二版 pp. 139～141）。後者の批判は Pruzan が本書の目的を理解していることに半ばの原因がある。単なる世界ではなく，宣教活動の進展しつつある世界を伝えることが Mortimer の意図である以上，アジア・アフリカの比重が大きくなるのは当然である。さらに宣教活動が侵略と随伴するものであることを考えれば，このようなページの配分は「進展する世界地図」の一面を見事に把えているというべきであろう。もとより現時点からふりかえって，慈善主義に安住できた Mortimer が社会を見通せていない，と指摘するならば，それは間違いではない。しかしそれは当然すぎて指摘する意味がない。必要なのは，当時の水準で見て彼女が格別に疎いのか否かを考えることであり，さらには，もしそれほどに社会情勢に無知であったのであれば何故そうした人物の著作が半世紀にもわたって改訂され読み続けられたか，を問うことである。

・差別

Pruzan は Mortimer の記述を racism とする[33]。しかしそれが単純なものではないことはすでに述べた。問題は Mortimer よりも，それに対する Pruzan の論じ方にある。すなわち，こうした偏見を文脈的に把えようとせずに，偏見は今でも／誰にでもあるという形で個人の悪徳に帰してしまう。これこそ Mortimer の社会理解の仕方である。Mortimer の著作をそれ自体によって理解しようとせず恣意的に造型した Mortimer を擁護し救済しようとしても，それは無意味な営為であろう。

4　訳書の問題点

①記事の順序を変更している箇所がある。すなわち，ロシアの「性質」の項（訳書 pp. 76～77）は原書（本章で「原書」とは Pruzan（2005）を指す）ではモスクワの次にある（p. 53）。また原書では米国の都市誌（訳書 pp. 255～257の部分）は奴隷・森林・大平原などの記事（訳書 pp. 249～255の部分）よりも先にある。

②挿絵の処理に問題がある：第一に欠落がある（ダオメー王の杖・足台の絵，および謝辞（訳書 pp. 296～297）に添えられたアイスランドの絵である（前掲注22）・21）を参照）。第二に挿入位置が誤っている（訳書 p. 223の図はヌビアではなくアビシニアの挿絵である，上述のインディアン宣教の絵はインディアンの記事（訳書 pp. 262～265）中になければならない。逆に注27）に述べたようにカリフォルニア人の図は原書の不適切さを正す結果となっている）。第三にキャプションの改変がある（上述カリフォルニア人の図のキャプションのうち，「とくに乗馬と賭け事には目がありません」は原書のキャプションにはない[34]）。

ちなみに，訳書カバーには原書にない「ロシアの小住宅」（*Near home* 初版 p. 124）・「日本の紳士」（*Far off 1* 初版 p. 275）の絵が使われている。Pruzan による文章の改竄は原作に当たって初めて気づくものであろうが，挿絵のキャプションは原書だけでその不自然さが明らかである。訳者は原作を見ていないのかもしれないが，原作を見る機会があった以上，それに当たって，キャプションに関する原書の作為について注意を喚起するべきであった。

③目次に「南アメリカ」の見出しを落したために，原書の構成を混乱させている。

④原書巻末につけられた参考文献が全く言及されずに削られている。本書の序文は一二の例外を除いて参考文献を指示していないので，文献表なしでは Pruzan の記述の根拠を知るすべがなくなる。同様に，原書が引用している Gaskell の地図が言及もなく削られている（削除した方が原作には忠実であろうが，Pruzan に対してはいかがか）。

⑤地名表記（およびそのカナ化）に混乱がある。もとよりこれは単純に処理できるものではない（過去の地名が含まれるゆえ解決はさらに難しい）。しかし本書の性格からして，まず現在（日本で）通用の呼称・表記を用いそれがない場合には原書に従う，ことを原則とするのが穏当ではなかろうか。本訳書でも基本的にはこの原則に則っているように見える。しかしそれならばヒンドスタンはインド[35]とすべきであり，シャム・マラッカ・アビシニア・ヌビア・アシャンティー・ポルトリコもタイ・マレーシア・エチオピア・スーダン・ガーナ・プエルトリコとするべきであろう。タタールはトルキスタンの方がいいのではないか。Circassia はチュルケスとするよりも北カフカスとすればどうか。逆に，アラビアをわざわざアラビア半島とするのはおかしい。さらに上記の原則からすれば，Edinburgh をエジンバーグと表記する（訳書 p. 46 その他）のも奇妙である。筆者は寡聞にして知らないが，当時のイングランドではそう発音されていたのかもしれない。しかしそれを理由としてこう表記することは本書にはふさわしくなかろうし，あえてそう表記するのであればそれを注記すべきである。まして初出になる Pruzan の序文の部分でもそれを用いる（訳書 p. 16）のは衒学的にすぎる。同様のカナ

表記の問題として，ガウシャ（訳書 p. 289）やオーツ麦（訳書 p. 291）はガウチョ・オート麦が妥当だろう。

⑥訳注も適切とはいえない。アビシニアを「旧エジプト」（訳書 p. 9 ）とするような誤りは論外として（しかもこの訳注は訳書 p. 224のものと不整合である），インディゴについて「マメ科の植物からとる染料」（p. 239）と注するのはいかがなものか（インディゴに注が必要とは思えないが，つけるなら「藍の原料」で十分であろう）。クリスマスツリー（訳書 p. 90）や喜望峰（訳書 p. 230）に関する蘊蓄も本書の理解に必要なものとは思われない。逆にプロイセンに注記が必要ならカリフォルニアが今のカリフォルニア州でないことこそ注記されるべきではないだろうか。さらに，「オーストリアはピエモンテ・ローマ・トスカナ・ナポリといった新しい脆弱な共和国を粉砕した」（原書 p. 54）を「ピエモンテ，ローマ，トスカナ，ナポリによる新しい共和国はオーストリア軍に破れて崩壊」（訳書 p. 82）と誤訳したうえ，「新しい共和国」に対して「ヴェネト共和国のこと」という見当外れの訳注をつけている場合もある。

⑦誤訳が散見する（その一部はすでに指摘した）。序章（訳書では「はじめに」）末尾の「生涯一度もイングランドを離れなかったモーティマー夫人」（訳書 p. 33原書 p. 20。正しくは「イングランドをほとんど離れることのなかった」）のように，他の部分と読み合わせれば明らかに誤りであることがわかるものもあり，いささか不注意にすぎるのではなかろうか。

5　むすびにかえて

本稿は Mortimer の地理書を抄出した Pruzan（2005）・プリュザン（2007）を批判するとともに，その前提として Mortimer 地理書の概要を紹介した。彼女の著作を十全に理解するためには，児童文学家ないしは教育者としての Mortimer の著作活動のなかで考える必要がある。そして彼女の直近の背景としては福音主義・児童文学・初等教育の19C 英国における展開について，遠景としては旅行ブームと特に中下層階級における「地理的」知識の希求や国民意識の創出などの動きについて，検討せねばなるまい。

そうしたなかで Mortimer の地理書を考えるうえで特に重要に思われるのは Goodrich（1793～1860）の Peter Parly シリーズである[36]。Moore, H.に傾倒しピューリタン的宗教倫理を強く反映させていたという Goodrich の著作は，それだけでも Mortimer に親近性があったであろう。しかも Goodrich が Peter Parley シリーズを開始したのは Mortimer が教区学校を開始した1827年である。そのシリーズに（1829年から）地理書が含まれたことは，Mortimer が地理書を書く（あるいは書こうと考える）うえで影響があったのではなかろうか。Peter Parley には偽書が多いため影響を考えることは単純ではないが，Mortimer が Goodrich と親好があったのでなければ，Peter Parley を冠した書は全て同等の影響を与ええたと考えてもよかろう。当面こうした点を中心に Mortimer の地理書の位置を考えていきたい。

付記　本稿作成にあたり鳴門教育大学附属図書館を通して諸大学附属図書館の文献を利用させていただいた。関係各位にお礼申し上げます。本研究にあたっては，Project Gutenberg・Internet Archive さらに Google 社によってインターネット上に公開された古文献およびその所在情報が不可欠であった。昨今の著作権をめぐる議論では著作権の本義を見失った経済的観点でのみ論ぜられることが多い。古文献の電子化・公開に関わる Google 社の活動の全てが適切なものとは思われないが，同社を含む古文献公開活動に多大な学恩を受けたことは確かである。感謝いたします。また本稿脱稿後，*Near home* および *Far off 1* の三版も web 上に公開されたことを知った。今後はこれらも含めて検討を進めたい。

注

1）Mortimer の伝記としては姪の Meyer, L.によるものがある（MacFadden, 2005～2006）。しかし筆者は閲覧の機会を得ていない。Mortimer の伝記的事実に関わる記述は，特に注記しない限り MacFadden（2005～2006）による。

2）松井（2008）によれば，教区を単位とした学校の設置に関する法案は1807年・1820年に英国議会に提案されいずれも廃案に終わっている。したがってこの時期には法的に規定された教区学校は存在しなかったと思われる。ちなみに，1820年の法案による教区学校は，週１～４ペンスの授業料を取る（ただし極貧層に対しては授業料免除も認めうる）週日学校（１日６～８時間）で，国教会の監督のもとで宗教教育と世俗教育とを行うものである（松井（2008）第８章による）。

3）正確には，初版は *The Countries of Europe Described* で，二版以降 *Near Home ; or, The Countries of Europe Described* と改題された。しかし煩を避けて以下では初版も *Near home* という書名で呼ぶ。

4）各版の出版年次は MacFadden（2005～2006）によった。しかし Internet Archive（http : //www.archive.org/）で公開されている米国版（UF00001779.djvu）の扉には1852年と記されている（同じ本をテクスト化している Project Gutenberg（http : //www.gutenberg.org/catalog/）でも1852年刊としている）。また Google が公開する1860年版の *Far off 2*（http : //books.google.com/books?id=IWIDAAAAQAAJ&as_brr=3&hl=ja の Far_off.pdf）は明らかに二版の内容である（この書は British Library の目録に著録されているものと同じであろうが，同目録からは新版であるか否かは知りかねる）。

5）British Library の目録には頭文字しか記されていないため確実ではないが，注１）で触れた Mortimer の伝記を書いた姪と同一人物であろう。

6）筆者はこれらに加えて，筑波大学附属図書館蔵の *Far off*（part I が1869年刊，part II が1868年刊）も閲覧することができた。かくして筆者は３冊のいずれについても初版・二版を見えたが，三版は未見である。本稿で言及・引用するものの書誌は以下の通りである：

Near home 初版：http : //books.google.com/books?id=aMcBAAAAYAAJ&as_brr=3&hl=ja の The_countries_of_Europe_described.pdf

Near home 二版：http : //books.google.co.jp/books?id=kYQVAAAAYAAJ&as_brr=3の Near_home__or__The_countries_of_Europe_d.pdf

Far off 初版：１は http : //books.google.co.jp/books?id=01kBAAAAQAAJ&as_brr=3の Far_off.pdf，２は http : //books.google.com/books?id=Dnp–hgzmWTMC&as_brr=3&hl=ja の Far_off____.pdf

Far off 二版：上掲筑波大附属図書館蔵本

なお，確認できる *Far off 1* に関する限り，米国版は英国版と組み方が違うのみならず，英国版にある挿図が欠けていたり（たとえばイスラエルの Church of Holy Sepulchre（p. ６）ほか全部で22図がない），一部の典拠注が落ちている（たとえば英国版 p. 108 と米国版 p. 116）。あるいは本文が改変されている可能性もあるかもしれない）。

7）このことは，英国 Amazon の古書目録にさらに多くの年次のものが挙げられている（ただし刊年の記載は必ずしも信用できないであろうが）ことからもうかがえる。

8）Wikipedia（http : //en.wikipedia.org/wiki/Favell_Lee_Mortimer）によれば同書の発行には，福音主義者の出版組織であるは RTS が関わっていたという（RTS については松本（1987）を参照））。おそらくは類書と同様に，日曜学校の報賞などとしても使用されたのであろう。

9）筆者の利用した *Near home* 初版は米国版であり二版は英国版である。注６）にも述べたように両国版は組み方が違うのみならず掲載している図版数も違う可能性があるため，単純に増減多少を云々することはできない。しかし二版が初版よりも増補されたものであることは確実であろう。

10）二版の図版目次に地図が掲載されているのに対して初版の目次にはそれがない。しかし目次にないだけで実際に存在した可能性もある（筆者の見たファイルでは巻頭部分が収録されていないため，スキャニングの際に割愛されただけかもしれない）。また米国版のゆえに地図が省略されたことも考えられる。本文では初版でも，“the map”を参照しながら読むよう記述されている箇所がある（pp. １，261など）。

11）*Far off* では目次における見出しの字下げに一部混乱があるうえ，本文中の見出しに使うフォント（字体ならびにサイズ）にも不整合があるかに見える。ここでは本文中の見出しをもとに表３のような構成と判断した（唯一の例外は二版の The Hottentots である。フォントは「国」級のフォントで表記されているが，その後にケープタウンが現れることから，初版同様 Cape Colony の一部と見なした）。しかし次の２点は判断が困難である。

①*Far off 2* 初版では South Africa は，アフリカ・アメリカと並ぶ大見出しではなく国名クラスの見出しであるが，その前の Barbary との間の区切りには，他では使われない波線を用いている。

②*Far off 2* 二版では，Barbary まで国名に使われていたフォントが州名（南アフリカ・アメリカなど）に使われ，国名のフォントはやや細身のものが使われているように見える。

12）この「太平洋」はオーストラリア・タスマニアを除く太平洋域を指す。Mortimer はオーストラリアを，ヨーロッパ大陸ほどもある世界最大の島である，とする（*Far off 1* 初版 p. 278）。*Far off* の副題ではオーストラリアを（アジアなどと並ぶ）州級の単位と見なしているように見えるが，本文中では国として扱っている。したがって，オーストラリアのみいずれの州にも属さないことになる（あるいは，特に初版ではアジアの一部と見なしていたのだろうか？）。なお *Near home* と同様に *Far off* においても叙述の単位が「国」であることを Mortimer は明示しておらず，またそれらをまとめた単位をたとえば「州」と呼ぶといった記述もない。本注および以下で「州」という語を用いるのは筆者の叙述の都合にすぎない。

13）仮に「総記」としたが，アジアの場合，アジアが栄光の地であったということを記した10行ばかりの文にすぎない。他の総記も，アジア総記よりはやや内容はあるものの大差ない。

14）これらの典拠文献についてはまだほとんど検討していないが，書名だけから判断する限り，探検・旅行の一次的な報告書類が多く，それらを元に二次的に作成された地理書類はほとんどないようである。

15）松陰の事件を伝える Perry 艦隊乗組員の報告は，正式報告書（1856年刊）の他にこの Spalding のものや Williams のもの（ともに1855年刊）がある（書誌については洞（1970）参照）。これらを利用した二次文献がどの程度あったかは不明ながら，*Far off 2* はそれらに伍して事件を紹介した最初期の文献の一つといえる。

16）Spalding が ‘it was found that they had that morning been sent to the city of Yedo, and as the attendant at the place made sign, for the purpose of being beheaded’（p. 283）とだけ書いている箇所を，米兵と日本人との会話に仕立てている。

17）ただし，*Near home* 二版の part Ⅰには「イングランド・ウェールズ・スコットランドは一つとなって・・・［引用者略］・・・ブリテンと呼ばれる」(p. 7）とか「グレートブリテンとアイルランドとは同じ女王に支配され，一緒に一つの王国と呼ばれる」(p. 9）といった表現も現れる。変化の予兆というべきであろうか。

18）*Far off 2*（1854年本）巻末の広告では *Far off 1* の価格は５シリングとなっている。一方 *Far off 2*（二版 1869年本）巻頭の広告では *Near home* は５シリング，*Far off* は各冊４シリング半である。多少の変動はあるにせよ大差ない。

19）清水（1994，pp. 197～222）によれば，1853年の本の平均価格は８シリング4.5ペンスで（しかもこの価格では中流階級でも裕福な少数者しか購入できなかった），中流階級向けに刊行された廉価版叢書は２シリング程度であった。他方，当時，熟練労働者でも週１ポンド余の収入しかなかった（長島（1987）第２章）。

20）ただしこれが Pruzan によるものであることは，筆者は訳書（プリュザン，2007，p. 36）の訳注によって知った。Pruzan の原文にはそうした注意書きが欠如している。Pruzan の読者は，これが Mortimer からの引用ではないということを，Mortimer（もしくは Pruzan）に当たることによって初めて判断できる。なお，以下本章と次章とでは，特に断らない限り本書とは Pruzan & Mortimer（2005）を，訳書とはプリュザン（2007）とを指す（ただし筆者が利用した原書は2006年刊のペーパーバック版である。また原書の著者には Mortimer も挙げられているが，以下では簡便のためこの書を Pruzan（2005）として言及する）。Pruzan の著作に対して Mortimer の地理書を原作とよぶ。なお，次章で訳書を取り上げる際の便宜のため，本章で Pruzan を引用する際は訳書のページ数を併記した。

21）うち一つ（アイスランドの「Grand Geyster と Hecla 山」（*Near home* 初版 p. 248の次。この本では挿絵の目録が不完全なため，題名は二版（p. 319）による））は謝辞のページ（Pruzan，2005，p. 195）に，キャプションなしで置かれている。

22）キャプションに用いられた文は，１例を除いて全て Pruzan の抄出文の中にある（例外は，p. 161のダホメ王の杖と足載せ台との絵（出所は *Far off 2* 初版 p. 127）のキャプションである）。しかしその文が挿絵の直近にあるとは限らない。

23）これは英領アメリカと米国との住民の違いを述べた文である。

24）この挿絵に関しては，初版では挿入位置と題名とが齟齬すること，二版で題名が変更されたこと，は既述の通りである。Pruzan は原作の単純な誤謬と考え，二版にしたがってシャムの女性と見なしたのかもしれない。しかしそもそもこのように問題ある画像を利用しなければならない理由がないであろう。

25）もとより，Mortimer はシャム人が見苦しいと書いたうえでシャム人の絵を載せている。したがって Mortimer はその描かれたシャム人も見苦しいと見ていたはずだ，という解釈は可能である。しかしそうした認識を，文章でのみ示すか，それとも画像でさらに強調するか，というのは表現における大きな差である。そもそも Mortimer に忠実に依拠するのであれば挿絵の題名改変は必要なかったのである。要するに，これらの処置に示されているのは Mortimer の偏見ではなく，Mortimer に借口した Pruzan の偏見だといわねばなるまい。

26）この挿絵の題名は二版（p. 68）でも「仏陀」のままである。しかし明らかに仏陀の絵ではなく，どちらかといえば中国風の人物である。Mortimer あるいはその原資料が誤っているのであろう。とはいえ，これが孔子であるという根拠を Pruzan は示したわけではなく，たとえそうであっても彼の判断で変更したのであれば改竄といわねばなるまい。

27）訳書では故意か誤りか，原作と同じくカリフォルニアのページ（訳267）に置かれている。

28）Pruzan は，1860年代の奇行を記して，Mortimer が地理書執筆時に脳を患っていた可能性さえ示唆し，その根拠として Constable（1950）を援用する。しかしこれも恣意的な部分引用である。Constable（厳密には彼女が引用する，Mortimer の姪の手紙）が認めているのは，Mortimer の最晩年における罹病の可能性である。「彼女が執筆していた当時はそうでなかったことは確かである。彼女の著作物の明快さ・論理性が，彼女が正気だったことの端的な証拠である」（Constable，1950，p. 83）というそれに続く部分を，Pruzan は無視している。

29）「「これまでに書かれた，最も露骨に嗜虐的な児童書の一つ」の作者」（p. v。訳書はこの文を欠く）。Pruzan は引用符つきでこの文章を掲げているものの出典を示していない。しかしながら教訓物語（あるいはそれに先行するピューリタンの児童文学）は概して恫喝的であり，その意味で嗜虐的であった（瀬田・猪熊・神宮，1971，pp. 60～87。Sherwood の作品には，絞首刑にされた罪人を子どもに見せる場面があるという。筆者には，Pruzan の引く Mortimer の記述がそれより嗜虐的だとは思えない）。教訓物語の作家をおしなべて「最も嗜虐的な作家」と考えるのなら，Mortimer に関してあえてこれほど過激な表現をする必要はないはずである。

30）19C 半ばには，小学校教育に関して，聖書は最も有用な知識を含む，と想定されていた（ロースン・シルバー，2007，p. 332）。Mortimer らにとって，宗教的真理は世俗的知識と背反するものではなくむしろその根底をなして小説などの虚構世界と対比されるものであった。Mortimer が世俗的知識や科学的知識を聖書と同じ側にならべるのは当然のことであろう。Pruzan が無視した *Near home* の序文では，当時通用の教育方法を批判するなかで，通常の教育方法が有効なら「あらゆる科学の要素を子どもに詰め込んでいるにもかかわらず，大人になって愛読するのが合理的な論文や歴史書ではなくただただ小説である，ということに何故なるのか」（初版 p. v）と述べている。

31）マダガスカルの記事は *Far off 2* 二版では44ページしかない（表３）。

32）さらに Pruzan は国々の記載の順序についても「全く即興的」［downright　jazzy］で，「アイスランドとスウェーデンとの間にシチリアが挟まれる理由は何人にも理解できない」と批判する（p. 9 訳書19）。この批判は必ずしも不当ではないが，すでに述べたように，理由を推測できないわけでもない。

33）Pruzan はそうした事例の一つとして，アシャンティの戦士の残虐さ，ダオメーの崇拝者の野蛮さ，バンツー族の愚劣さなどの記述を挙げる（p. 9 訳18）。しかしこれらに関しては全て錯誤であるか歪曲である。*Far off 2* にはアシャンティの項に戦士について記述はなく，残虐とされているのは王の死亡に際してその妻や奴隷100人が殉死させられたことである。ダオメーでは王が自身を神のごとくに崇拝させていることが記述されているのみで，それ自体に対する論評は加えられていない（その崇拝をするのは娘子軍のなかで特に軍功高い者であり，娘子軍の残虐さは述べられているものの）。そしてバンツー一般についても語っている部分は見あたらない。これらは，論旨に影響のない些末な誤りとはいえ，Pruzan の記述の不正確さを示す事例といえよう。

34）さらに付言すれば，前述のように本書のキャプションは本文中の 1 文を繰り返したものであるが，訳書では本文中と訳文が同じではない。意図的なものか単なる不整合の結果であるのか明らかではないが，そのために，本文記事と挿絵とを結ぶ唯一のきずなが失われ，挿絵はますます意味不明となる。

35）訳書 p. 165の訳注でヒンドスタンを「インド北部のヒンドゥー教地帯」と解する立場からすれば「インド北部」であろうか（ちなみに訳書 p. 9 の訳注では単に「インド北部」とする）。しかしこの訳注は，本書に関しては誤っている。本文を見れば英領インド全域（厳密にはインダス川以西は Beloochistan として別に扱われているが）を指していることは明らかである（*Far off 1* 所収の地図でも Hindostan はインド半島全域にまたがる形で描き込まれている）。

36）本章では Goodrich および Peter Parley シリーズについては Smith & Vining（1989，1991）による。

文献

カーペンター・プリチャード（1999）『オックスフォード世界児童文学百科』原書房

川本真浩（1997）前世紀転換期イギリスにおける帝国と地理 ――「帝国意識」形成の歴史的背景 ――。待兼山論叢（史学），31，27～50

清水一嘉（1994）『イギリス小説出版史　近代出版の展開』日本エディタースクール出版部

清水一嘉（1996）貸本屋と読者大衆。松本昌家ほか編『英国文化の世紀 4　民衆の文化誌』研究社出版，71～95

トゥアン（2008）ある学びの人生。グールド・ピッツ編杉浦芳夫監訳『地理学の声 ―― アメリカ地理学者の自伝エッセイ集 ――』古今書院，336～356

長島伸一（1987）『叢書現代の社会科学　世紀末までの大英帝国』法政大学出版局

プリュザン，T．編三辺律子訳（2007）『モーティマー夫人の不機嫌な世界地誌』バジリコ

洞富雄（1970）解説。洞富雄訳『ペリー日本遠征随行記』雄松堂，527～553

松井一麿（2008）『イギリス国民教育に関わる国家関与の構造』笹気出版

松本享子（1987）ヴィクトリア朝の児童文学と女性作家たち。学苑，573，118～107

ロースン・シルバー（2007）『イギリス教育社会史』学文社

Baker, S.（1996）Jesse Olney's innovative geography text of 1828 for common school. *Jour. of Geogr*., 95, 32～38

Constable, R.（1950）Letter to the editor. *The New Yorker*，3 月 4 日号，79～83

Guyot, A.（1848）*The earth and man*. Gould and Lincoln

MacFadden, F. R.（2005～2006）Favell Lee Mortimer biography. in BookRags Biography（http : //www.bookrags.com/biography/favell–lee–mortimer–dlb/）

Pruzan, T. & Mortimer, F. L.（2005）*The clumsiest people in Europe, or Mrs. Mortimer's bad–tempered guide to the Victorian world.* Bloomsbury

Smith, Ben A. & Vining, James W.（1989）Influences on the American geographer Samuel Griswold Goodrich. *Jour. of Soc. Stu. Research.*, 13－2，10～18

Smith, Ben A. & Vining, James W.（1991）Samuel Griswold Goodrich a.k.a. Peter Parley Early American geographer. *Jour. of Geogr*., 90, 271～276

Spalding, J. W.（1855）*The Japan expedition : Japan and around the world*. Bedfield（http : //books.google.com/books?id=lrM9LUyd5RsC&oe=UTF–8の The_Japan_expedition.pdf による）

Stoddart, D. R.（1986）*On geography : and its history*. Basil Blackwell

Geography books written by Mortimer, F. L.: A criticism on Pruzan, T.'s *The clumsiest people in Europe, or Mrs. Mortimer's bad–tempered guide to the Victorian world*

TATUOKA Yuuzi

(Keywords : Mortimer, F.L. Pruzan, T. 19th Century Britain geography education juvenile book)

In 1849－1854, a juvenile writer Mortimer, F. L. published two titles of geography book, *Near home* and *Far off*. Pruzan, T. abstracted severe description form these books and compiled his *The clumsiest people in Europe*.

Pruzan neglected ordinary description and picked up eccentric one, and made up emotional style, which he attributes to Mortimer, by gathering sentences from plural paragraphs into one paragraph. He even altered the original neutral captions of illustrations into sensational ones. His characterization of her books as superficial, obsolescent and unrealistic is in valid. In the prefaces of the books, Mortimer declared that books for infants should be superficial so as to inspire their desire to know, and that her books were preliminary to reports of missionary activities. She attached importance to secular knowledge, her books for them wrere not 'sadistic'. Egocentricism of Mortimer, perhaps common in mid–19th century Britain, is backed up by civilized/savage discrimination and the idea of equality of souls in the sight of God. It was far from nationalism which prevailed from the latter half of 19th century. Pruzan failed to grasp this point and to examine it in the context. Rather he regarded her 'racism' as omnipresent in everyone and everytime, and forgave it in the same 'scornful' manner as Mortimer.